

いこいの森

No.5

〒241-0811 横浜市旭区矢指町1197-1 電話 045-366-1111



田口芳雄 副院長

平成16年4月から副院長になりました田口芳雄と申します。脳神経外科部長を兼務しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、大きな病院というのは不思議な組織だと思っていた。というのは、皆様にご近所の医院を受診されますと、まずカルテが作られます。頭が痛かろうが、腹が痛かろうが、ぶつけて手足が腫れようが、みな一つのカルテにそのつど病状が書かれ、見立てが記録され、治療計画とその内容が示されます。ですから、たとえ担当医師でなくとも個人の病気についての履歴は一つのカルテをみれば簡単にわかります。患者像が曖昧になることはありません。まして、いつも診ている担当医師であれば、その患者さまがどのような病気をされたことがあるのか、どのような体質であるのか、大概是頭に入っていますので、身体に合わない薬を処方するなど、まず無いといってよいでしょう。ところが、大病院になりますと、診療という点では医院と何ら変わらないのに診療科がいくつにもわかれ、それぞれの診療科でカルテができあがります。内科のなかでも専門によって血液腫瘍内科、リウマチ膠原病内科、腎臓高血圧内科といった具合に細分化されます。一個人一カルテシステムではありません（お断りしておきますが、西部病院の内科外来は一個人一カルテシステムです）。これが私にとっては不思議なことなのです。私が一患者になったことを仮定して考えると、私という個人は唯一無二であるのに、異なった診療科を受診するたびに、新たな私ができあがるのです。このようなシステムは、私をより専門的に診て治療するという利点があるでしょう。その反面、お互いの情報交換という点では不利益が生じます。かつて、一般の総合病院では、ある診療科で処方された薬を他の診療科は知らないといったことがありました。それでは私という患者は存在せず、私の虚像がいくつかの診療科を渡り歩いていることになります。現実の世界ではあり得ません。皆様ご存知の通り、いまは各診察室にコンピューターが設置されています。オーダーリングシステムといいますが、これによってお互いの処方や検査結果が瞬時にわかります。私という患者像はかなり鮮明になりました。それでもまだ虚像が見え隠れしていて、情報の共有化が十分とはいえません。多職種の治療者がそれぞれの専門知識を駆使して治療を行うチーム医療の中にあっても、しかもマンパワーの少ない現状にあってはそれが実体なのです。

私という患者が大病院の中で実像として存在するための改善策の一つは、更なるIT（情報技術）化です。IT化は脳機能の統合と似ています。生物が進化、発達すれば、生物はその発達程度に応じて様々な機能を持つようになります。その機能を統合するのは脳の役目です。生物が進化すればするほど脳は大きくなります。そうでないと機能が統合できません。そこに必然性があつたのです。遅ればせながら病院の不思議を解決するための必然性を嫌というほど実感しています。整然と統合された脳機能を持つ聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院のなかで、皆様に「この病院に来てよかった」といって頂けるよう、努力する所存でございますので、よろしくご協力のほどお願い申し上げます。

